

市民が進めたトウキョウサンショウウオ調査保全活動

トウキョウサンショウウオ研究会事務局 川上洋一

野生生物の保全には生息状況について把握することが欠かせない。トウキョウサンショウウオは、日本の止水性サンショウウオの中では調査が比較的進んでおり、そのデータも種や生息地の保全についての市民活動や行政の施策によく反映されてきたと考えられる。2020年に特定第二種国内希少野生動物種として最初に指定されたことも、その表れと言えるだろう。

トウキョウサンショウウオは1931年に田子勝彌氏によって東京都西多摩郡多西村(現・あきる野市)の標本によって記載されているが、その生息状況が把握されるようになったのは、1960年に八王子市横川町の弁天池(現在は絶滅)で、同市の中学校教諭であった金井郁夫氏によって戦後初めて確認されたことを嚆矢としている。

氏はその後も多摩全域にわたる調査を進め、1974年には「トウキョウサンショウウオ・生活の神秘をさぐる」を出版、関心をもった読者がアマチュア研究者として、その後の調査にも取り組むことになった。この成果は1979年に環境庁(当時)の第2回自然環境保全基礎調査・動物分布調査報告書として発表されている。

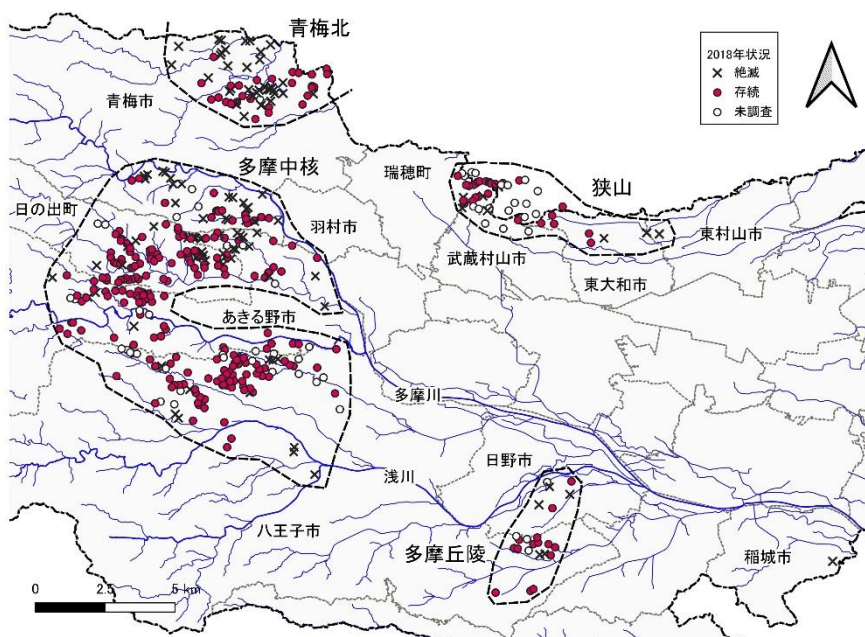
しかし生息状況の把握が進むのに従って、この種の生息環境が丘陵地の開発などによって急速に破壊されつつあることも明らかになり、その将来が憂慮されるようになった。とくに1980~90年代からは圏央道開通に伴う大規模な開発計画が次々に立案され、その多くが重要な生息地域に重なっていることも、種の存続にとって大きな危機的要因と考えられた。

こうした状況に対して、金井郁夫氏とのつながりが強かった研究者や市民団体などが中心となり、トウキョウサンショウウオ保全のための生息状況の継続的調査や情報交換を進め、市民の意見を行政サイドに反映させることなどを目的に結成されたのが「トウキョウサンショウウオ研究会」である。

1998年には東京都を通じて環境庁「種の多様性調査」への参加依頼があり、広く一般市民にも呼びかけることによって、計5団体のべ150名以上による都内全域の調査が実現した。集められたデータは研究者によって解析が行われ、各生息地の現状とともに、1999年発行の「トウキョウサンショウウオは生き残れるか?~東京都多摩地区における生息状況調査報告書~」としてまとめられている(研究会HPよりPDFにて講読可：<http://salamander.la.coocan.jp/salamander/>)。

都内の調査は同研究会によって現在も継続されており、10年ごとに都内全域についての報告書を発行するとともに、培われたネットワークを活かして、各地の研究者・団体との情報交換、行政との意見交換、シンポジウムの開催などを続けている。こうした活動によって一般市民の関心も高まり、生息地を抱える自治体のなかにはトウキョウサンショウウオをマスコット・キャラクターとした自治体もある。

講演では本種の調査保全に果たした市民の活動、研究者との連携、ネットワークの構築、一般への普及啓発活動などについて述べたい。



東京都における産卵場所の分布 (2018年度調査報告書より)